

意見聴取会 意見陳述申込書

天塩川流域委員会様

天塩川の河川整備・管理について、次のとおり意見を述べたいので申し出します。

平成 17 年 3 月 21 日

1. 意見陳述申込者

氏名

年齢 54 歳 性別 男

住所

北海道上川郡下川町

2. 意 見

ダムによらない治水対策（遊水地新案）と河川環境の保全について

治水計画の基本は、どこに問題があって、どのような手当てをするかです。河川法改正後、河川環境の保全が加わり、「治水と環境保全の両立」が必要になりました。私のこれまでの活動の中で残念に思うことは、天塩川流域の治水安全度向上の代償として、失われた環境があまりに多かったことです。

現在までの築堤と河道拡幅、低水路の浚渫や掘削、蛇行部の直線化、内水氾濫のためのポンプ場設置、国道の切り替えやかさ上げなどで近年深刻な水害は極端に少なくなっていることは委員会の中でもありました。この裏づけは、流域住民を対象にし、開発局が実施、2000 年 1 月に発表した「川づくりアンケート」の、洪水・土砂災害に対する安全性では 89%「安全だ」と答えているからです。また、洪水対策として具体的に進めてほしいことでは、河岸保護工・堤防の完成・内水対策・河道掘削で、ダムの整備をすすめてほしいは 7%にすぎませんでした。

さて、サンルダム建設はどこのために必要なのでしょうか。はじめにその答えを聞いたのは 1997 年 2 月札幌で開催された市民集会での開発局職員の説明でした。それによると(略)「天塩川水系の治水で一番のネックは音威子府村下流の狭窄部。計画規模の洪水が流れると、水位が上がって音威子府村の市街地が危ない。上流で水をコントロールしなければならないので、サンルダムの計画を考えた。」との初耳情

報でした。さらに確認のため東京にある北海道開発庁(当時)を、私が2月、友人が4月に訪れた。水政課ダム担当者の説明はいづれも「サンルダム計画は音威子府村下流狭窄部の問題を解決するためのもの。音威子府村を救うために、ダムを建設する下川町には犠牲になってもらうものです。」「音威子府のことが無かったら、サンルダムは必要ありません。」と、2度言い切った。同年5月、音威子府村村長に確認したところ「村を救うためのダムとは知らなかった」と語る。このようなことから私たちは同年、過去の資料や現地の聞き取りと調査を実施した。

道開発局は天塩川を代表する洪水として、音威子府村で発生した水害の航空写真をパンフレット類に載せていた。「第9次治水事業5箇年計画 北海道地域版」「もし・ものために―天塩川上流洪水氾濫危険図」「天塩川事業概要」では、音威子府村市街地付近で発生した水害の航空写真を大きく掲載してある。『北海道地域版』では「大出水の歴史をくり返さない整備が急務 低い河川整備水準 急がれる安全対策」、『洪水氾濫危険図』では「万一の備えを万全なものに まだまだ十分でない河川整備」、『事業概要』では「過去の爪痕 時に大河は大自然の亡者になる」などの見出しをつけ、水害の深刻さと治水対策の重要性を強調してあった。

ところが調査の結果、天塩川本流が溢れたのではなく、この水害は支流の未整備や低いところに水がたまる内水氾濫が原因だということが分かった。1998年8月開発局職員に現地説明。2001年6月「狭窄部が原因とした天塩川堤防の破堤、越水による外水氾濫は発生していません。」つまり、「開発局は音威子府の水害は天塩川が溢れたものではない」と認めた。上流にサンルダムを建設しても解決しない。

98年11月『音威子府以外に水害による危険な場所があれば示してほしい』と開発局職員に要請。出してきたものは『100年に一度の確率で起きると想定した大洪水のときの天塩川の流下能力と、現況の流下能力とを比較』したA4版の図1枚だった。

さて、「ダムによらない遊水地新案」について述べよう。遊水地についてもどこを守るためのものか、はっきりさせなくては効果的な配置はできない。守るべき地区の直上流に設置するのが効果的。にもかかわらず、開発局はそれを示さず、遊水地を選定している。しかも、前回の流域委員会では、名寄市と下川町間(上名寄地区)を新たに突然に候補地として説明し、不適とした。ここでは当初計画の 1、川西下流 2、川西上流 3、智恵文右岸 4、智恵文左岸とし、低水路掘削費(200億円)をさらに減額し、河川環境への負荷を極力排除できる「新遊水地案」を提案する。

容積

この「新遊水地案」は新たにサンルダム水没予定地内に遊水地を設置する。面積11.29平方キロメートル、28.2千立方メートルとなる。最大のメリットは、すでに用地は開発局が買収済。ダム堤体予定地より上流にあるため、下流低水路掘削が必要なくなった分、河川環境の保全がされる。ダムによらないため、サンル川の流れは通常保たれる。このため、河川環境が下流域の長きにわたり、現状に近い状態で保全される。魚道の必要がない。維持管理が安価などサンルダム建設よりも費用対効果が大きくなる。現在の道々を存続できる。水没予定地の森林伐採の必要が無く保全される。

ぜひ、委員会で十分にご検討をいただき、開発局に提案していただきますようお願い申し上げます。